

歯科衛生学生の障害者に対する意識と

ボランティア活動についての研究

ーわかふじアミィの活動をとおしてー

海老名和子

I はじめに

平成 15 年 11 月に第 3 回全国障害者スポーツ大会（以下「わかふじ大会」）が静岡県で開催された。この大会には、多くの学生ボランティアが参加・協力して大会運営を支えた。静岡県の要請を受けて本学の学生も、わかふじ大会を支える学生ボランティア（以下「わかふじアミィ」）として全学体制で参加・協力することになった。忙しいカリキュラムの中での活動は、学生にかなりの負担を与えるものであったが、大会に協力することで多くの障害者と関わったわかふじ大会は、学生にとって貴重な体験になったようである。筆者は、わかふじ大会担当教員として 14 年度に第 2 回全国障害者スポーツ大会（高知大会）に学生リーダーと共に視察に行き初めて障害者スポーツを間近で見る機会を得た。そして障害者が、ひたむきに頑張っている姿を見て大きな感動を覚えたのである。学生は、今までに障害者と接する機会は少なく、障害者に対するイメージも暗いものではないかと予測した。それが、障害者スポーツ大会に参加・協力したことで障害者への理解が深まり、障害者に対する意識に変化が出ると考えた。さらに学生ボランティアの意識が大会前後での差異について探求することとした。昨年度は、わかふじ大会に参加する前の意識（平成 15 年度静岡県立大学短期大学部研究紀要に「短大生のボランティア意識についての研究（第 1 報）」を報告した。昨年度の特別研究報告書では、大会終了後のアンケート調査の結果を報告した。今年度は、その意識変化とわかふじアミィの活動を経験していない学生の意識の違いを調査研究している。今回は、わかふじアミィの活動を経験していない学生に対してボランティア活動についての意識調査を実施した部分を報告する。

II 方法

無記名の選択、記述方式によるアンケート調査の実施。

実施時期：平成 16 年 12 月

対象者：S 短大生 1 年生名（回収率 %）

アンケート項目は、ボランティア活動について。

III 結果

障害者についての質問項目について

障害者が日常不自由を感じているのはどんな場面かという問については、外出するとき 83.3%、相手とのコミュニケーションがとれない 75.8%、自分の気持ちを上手く伝えられないとき 71.2%が上位を占めた（図 1 参照）。次に学生が、今まで障害者と接した経験についての問については、その他欄ではよく話をする、今もよく合う等かなり密に接して

いる場合であった。つまりよく話をする機会があった学生 17%、その他 11%を併せると 3割弱の学生が障害者と接した経験が豊富であるといえる。しかしそれは逆に7割の学生は、それほど障害者と接する機会がなくその経験浅いということである（図2参照）。

・ボランティア活動について

障害者と接する機会が少ないという結果がでたにもかかわらず、ボランティア活動の経験についての問では、ボランティア活動の経験があるが 85%で多くの学生がボランティア活動の経験があることが分かった（図3参照）。その活動は、自主的なのかそれとも学校の学習といった強制的なものだったのかという問に対しては、強制的だったのが 16%、自主的に活動したのが 71%であり圧倒的に自主的に活動した学生が多いことが分かった。また次にボランティア活動を行った時期についての問では、小学校高学年から短大入学後までがずっと経験者の 25%以上になっている。特に多かったのが、高校2年生に活動した学生で 40%であった（図5参照）。ボランティアの対象者については、高齢者に対しては 64%、障害者が 49%であった（図6参照）。

ボランティア活動を始めた第一動機については、自分自身の勉強になるからと回答した学生が多く次いで学校、クラブなどの指示を受けた、新しい出会いや経験をしたかったと回答している（表1参照）。また活動を通して嬉しかったことについては、自分自身の勉強になったと回答した学生が、80パーセントに達している。また新しい出会いや経験ができたこと、自分が人の役に立つことが分かったと続いている（表2参照）。

またボランティア活動の経験のない学生に対してボランティア活動への興味があるかの問については、経験のない学生のうち9割の学生がしたいと考えていた（表3参照）。ボランティア活動への期待については、障害者を少しでも理解したいと考えていることが分かった（表4参照）。鈍ボランティア活動に興味があっても参加しない理由としては、時間的余裕がない、一緒に参加する友達がいないと言うことが要因の上位になっている（表5参照）。

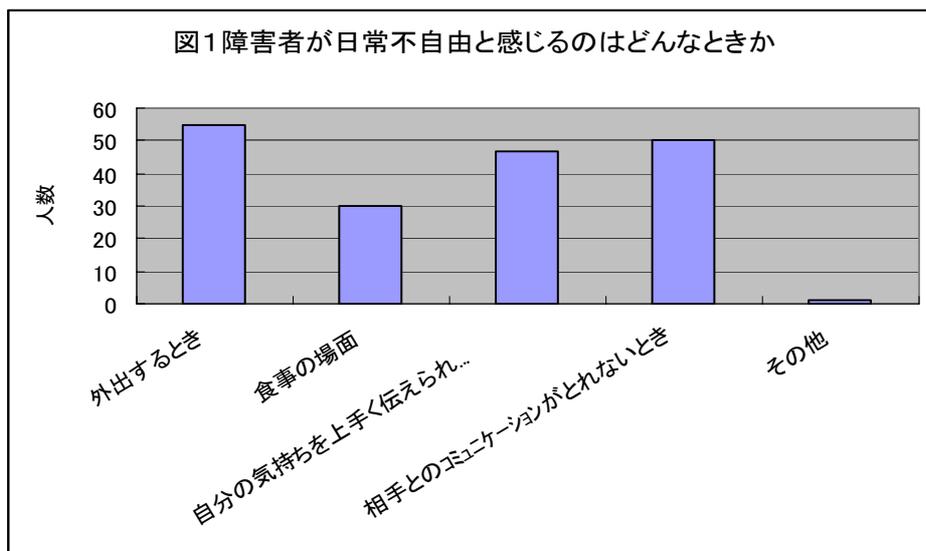


図2 障害者と接した経験について

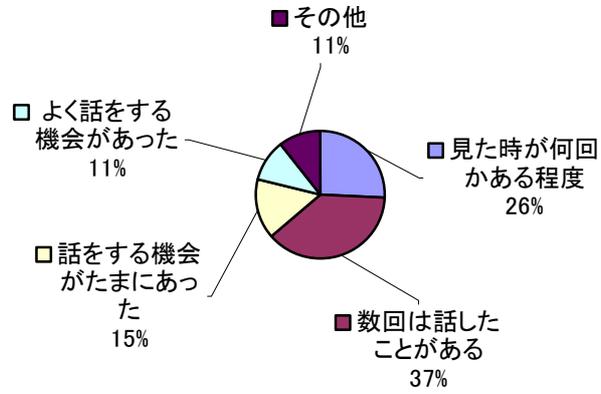


図3 ボランティア活動の経験について

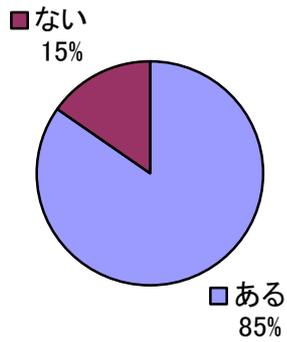
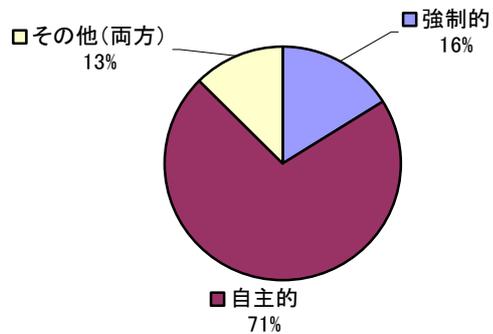


図4 ボランティア活動経験の状況について



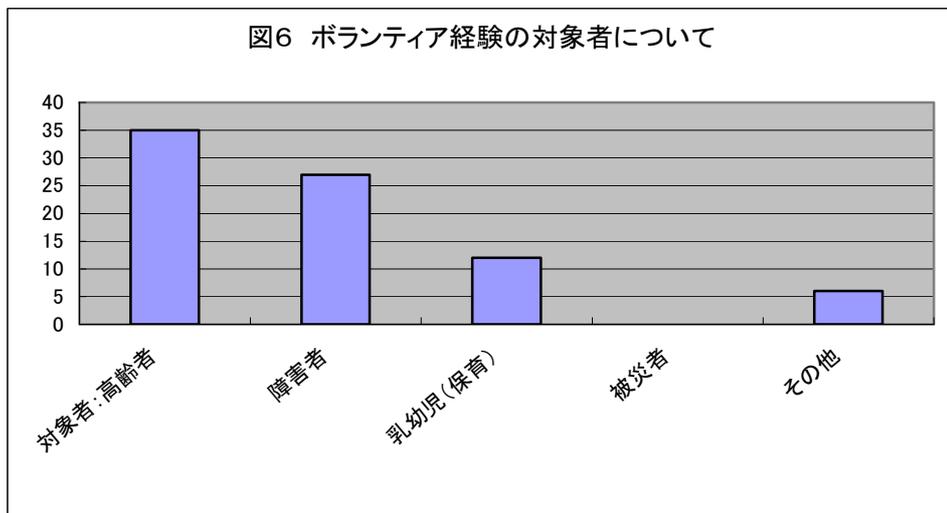
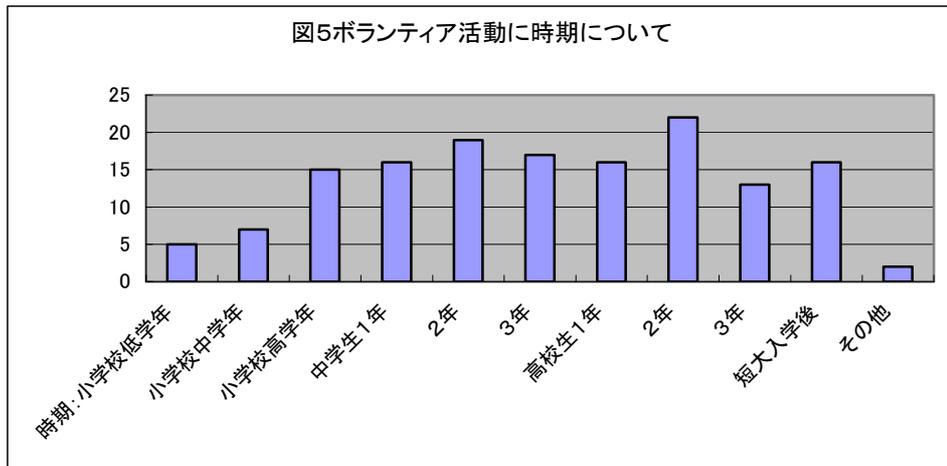


表1 ボランティア活動を始めた動機 (人)

自分自身の勉強になるから	36
新しい出会いや経験をしたかった	20
学校、クラブなどの指示を受けた	21
自分の評価を高めたかった	5
その他	5

表2 ボランティア活動を通して嬉しかったこと(人)

多くの人と仲良くなれた	15
自分が人の役に立つことが分かった	19
自分の活躍の場が持てた	6
自分自身の勉強になった	44
新しい出会いや経験ができた	25
その他	1

表3 ボランティア活動への興味について

ある	10
ない	1

表4 ボランティア活動への期待について(人)

障害者を少しでも理解したい	10
障害者とできるだけ話をする	4
いろいろな障害者と接すること	6
他のボランティアと親しくなれる	2

表5ボランティアに興味はあるがやらない理由

時間的余裕がない	9
他にやりたいことがある	4
ボランティアの情報がない	7
一緒に参加する友達がいない	3

IV 考察

今回の調査では、一般の短大生が、どのように障害者を捉えているのかということ、またボランティア活動経験の実態、活動についての意識を調査した。その結果、障害者をどのように見ているかということ、「外出するときに不自由さを感じている」と考えている学生が最も多く、次いでコミュニケーションの問題である「相手とのコミュニケーションがとれないとき」や、「自分の気持ちが上手く伝わらないとき」に不自由さを感じていると考えている学生が多かった。また障害者と接した経験については、見かけたことがあるや数回話したことがあるといった日常にはあまり接する機会がない学生が、63%で過半数を上回った結果であった。しかしこの数字は、昨年度行ったわかふじアミィの調査結果とそれほど変わらない。(1) またボランティア活動の経験については、予想に反して何らかの活動経験があると回答した学生が85%もいた。これは小学校からの総合学習や生徒会活動の一環としての活動またはクラブ活動などで行われるというようなことが影響しているとも考えられる。またそれに関連して、ボランティア活動を行った時期についての問いには、小学生高学年から短大に入学後まで3割程度の学生がボランティア活動を経験している。特に多かったのは高校2年生で、活動した経験者の40%の学生がボランティア活動をしていた。しかし学校の活動の中で行われた活動であれば強制的に活動したことになると単純に考えがちだが自主的か強制的かの問では、自主的にボランティア活動を行ったという学生が、71%と強制的と回答した学生に比べると4.4倍である。強制的でなく自主的にボランティア活動をしようと考えて実行したならば、本当にそれはすばらしいことである。

「ボランティア」は、本来「自発性」、「公共性」、「無償性」といった特徴のもので(2)、その点からすると昨年度行ったわかふじアミィの活動は、学生に選択の余地を与えていないので、ボランティア本来の意味からずれていることになる。本学は、わかふじアミィとして参加することは、医療を学ぶ学生にとっては何事にも代え難い貴重な経験になると考えた。

また今まで行ったボランティア活動の対象者とはという問に対しては、高齢者との回答が最も多く64%であった。小学生では、高齢者施設への慰問・訪問などが考えら、中学生頃からは、日常介護の内容になってくると思われる。また高齢者について障害者49%であった。そしてボランティア活動を始めたきっかけとしては、自分自身の勉強になるからという回答が最も多く、知らないことへの興味、好奇探究心というものが強く働いて実際の活動に結びついたことがわかった。このような動機から始めた活動をとおして嬉しかった事としては、自分自身の勉強になったことが一番にあがっている。この結果は、動機としての目的が実際に活動したことでほぼ達成できたということになる。

さてボランティア活動を経験していない学生には、ボランティア活動への興味についての問では、ボランティア活動をしたことはないが興味はあると回答した学生が多かった。またボランティア活動に期待することとしては、障害者に興味があるので少しでも障害者を理解したいと考えている学生が多いことがわかった。

わかふじ大会終了後のアンケート結果からも障害者と関わることで、障害者に対して好意的なイメージを持つことが出来ている。わかふじ大会について大半の学生が、非常に良い大会であったと考え、わかふじアミィとして協力したことは良かったと好意的に思っている。また障害者を理解することを期待した学生が多かったが、大半の学生が少なからず出来たと回答していて参加することの目標はほぼ達成したと考える。このように学生達にとって障害者への理解を深めることができ、さらに障害者を含めた多くの人々と共に大きな大会運営に関わったことは、多くの気づきがあったと考える。青木他は、ハンディキャップを持つ人と直接関わられる中で感じとり、実際にお世話や話をする中で得られた大きな学びであるといっている。(3)

また今後のボランティア活動については、機会があればやりたいという学生が多かった。今回の調査結果でボランティアに興味はあってもやらない理由でも時間的余裕がないことが第一位となっている。しかし社会人となったときには、もっと時間が取りにくいのが現状であろう。また一人では活動に参加しにくく友達と一緒にないと考えている学生も多いことがわかった。

ボランティアは、「相手の気持ちをくみ取る」、「自分の行動に責任を持つ」「常に周囲の人たちへの配慮を十分に行う」といったことが臨まれている。(4) これは、一般社会人の心構えに通じるものであると共に医療人として将来生きていく学生にとっては、必要不可欠なものである。学生がボランティア活動をすることの出来る環境を整えていくことも大学として検討すべきだと考える。

V 結論

平成15年度に静岡県で行われたわかふじ大会で本学学生が、わかふじアミィとして活動する貴重な機会を得た。そしてわかふじアミィの活動をとおして障害者に対する学生の意識の変化が見られた。今年度、一般の短大生にボランティア活動についてのアンケート調査を実施し、その結果を今回報告した。

今後は、この調査結果と昨年度の調査結果とをもう少し分析を深めていきたいと考えている。

VI 参考文献

- 1 海老名和子：「短大生のボランティア意識についての研究（第1報）、静岡県立大学短期大学部研究紀要、第17号、2004
- 2 森 秀樹：「カウンター・カルチャーとしてのボランティア」『大学生とボランティアに関する実証的研究』第2章 p23—98、ミネルヴァ書房、2003
- 3 青木壽子他：「ボランティア活動への参加と看護教育」、『看護教育』Vol.40No.4、医学書院、1999
- 4 大橋健一他：「阪神・淡路大震災における大学生のボランティア活動の意識と実態」、『大学生とボランティアに関する実証的研究』第2章 p23—98、ミネルヴァ書房、2003